

杜牧 目次

解説	凡例	一
I 出仕		一
感懷詩一首（感懷の詩一首）	七	一
及第後寄長安故人（及第の後長安の故人に寄す）	八	一
贈終南蘭若僧（終南の蘭若の僧に贈る）	三	一
寄牛相公（牛相公に寄す）	四	一
贈沈學士張歌人（沈學士の張歌人に贈る）	五	一
代人寄遠其一（人に代りて遠きに寄す 其の一）	三	一
其一（其の二）	四	一
和下宣州沈大夫登北樓書懷（宣州の沈大夫が北樓に登りて懷ひを書すに和す）	四	一
揚州三首 其一（揚州三首 其の二）	四	一
其一（其の二）	四	一
其三（其の三）	四	一
II 挫折		一
張好好詩 畿序（張好好の詩 畿びに序）	六	一
洛陽秋夕（洛陽の秋夕）	六	一

悲「吳王城」（吳王城を悲しむ）
究

牧陪「昭應盧郎中」在「江西宣州」、佐「今吏部沈公幕」。罷

府周歲、公宰「昭應」、牧在「淮南」隸職。敍「舊成二十

二韻」、用以投寄。（牧は昭應の盧郎中に陪して江西宣州

に在り、今の吏部沈公の幕に佐たり。府を罷めて周歲、公

は昭應に宰たり、牧は淮南に在りて職に隸がる。舊を敍べ

て二十二韻を成し、用ひて以て投寄す）
一

送「杜顥赴潤州幕」（杜顥が潤州の幕に赴くを送る）
一

隋苑（隋苑）
一

贈別 其一（別るるに贈る 其の一）
一

其一（其の二）
一

遣懷（懷ひを遣る）
一

揚州三首 其一（揚州三首 其の二）
一

其一（其の二）
一

其三（其の三）
一

寄 _二 揚州韓綽判官 _一 （揚州の韓綽判官に寄す）	堯
洛陽長句 _二 首 其 _一 （洛陽の長句 _二 首 其 _一 ）	堯
其 _二 （其 _の _一 ）	堯
題 _二 敬愛寺樓 _一 （敬愛寺の樓に題す）	堯
兵部尙書席上作 _一 （兵部尙書の席上にて作る）	堯
金谷園 _一 （金谷園）	堯
故洛陽城有 _レ 感 _一 （故洛陽城にて感有り）	堯
洛中送 _二 冀處士東遊 _一 （洛中にて冀處士の東遊するを送る）	堯
III 再び宣州へ	
題 _二 揚州禪智寺 _一 （揚州の禪智寺に題す）	堯
將 _レ 赴 _二 宣州 _一 留 _二 題揚州禪智寺 _一 （將に宣州に赴かんとして揚州の禪智寺に題す）	堯
杜秋娘詩 畝序 _一 （杜秋娘の詩 畝びに序）	堯
潤州二首 其 _一 （潤州 _二 首 其 _一 ）	堯
其 _二 （其 _の _一 ）	堯
題 _二 宣州開元寺 _一 （宣州の開元寺に題す）	堯
大雨行 _一 （大雨行）	堯
贈 _二 宣州元處士 _一 （宣州の元處士に贈る）	堯
題 _二 元處士高亭 _一 （元處士の高亭に題す）	堯
宣州開元寺南樓 _一 （宣州開元寺の南樓）	堯
有 _レ 感（感有り）	堯
念昔遊 _一 （昔遊を念ふ）	堯
其 _一 （其 _の _一 ）	堯
其 _三 （其 _の _三 ）	堯
自 _二 宣城 _一 赴 _レ 官上 _レ 京（宣城より官に赴きて京に上る）	堯
宣州送 _三 裴坦判官往 _二 舒 _一 州、時牧欲 _ニ 赴 _レ 官歸 _レ 京（宣州にて裴坦判官の舒州に往くを送る、時に牧は官に赴いて京に歸らんと欲す）	堯
自 _二 宣州 _一 赴 _レ 官入 _レ 京、路逢 _二 裴坦判官歸 _ニ 宣州、因題贈 _一 （宣州より官に赴きて京に入らんとして、路に裴坦判官の宣州に歸るに逢ふ、因りて題して贈る）	堯
往年隨 _三 故府吳興公夜泊 _二 蕪湖口、今赴 _レ 官西去再宿 _ニ 蕪湖 _一 、感 _レ 舊傷 _レ 懷、因成 _ニ 十六韻 _一 （往年故府吳興公に隨ひて夜蕪湖口に泊す、今官に赴きて西去し再び蕪湖に宿る、	堯
雪晴訪 _二 趙嘏街西所居 _一 三韻（雪晴れて趙嘏の街西の所居を訪ぬ）	堯
哭 _二 韓綽 _一 （韓綽を哭す）	堯
哭 _二 李給事中敏 _一 （李給事中敏を哭す）	堯
V 黄州刺史	
入 _ニ 商山 _一 （商山に入る）	堯
題 _二 商山四皓廟 _一 絕（商山四皓の廟に題す）	堯
商山麻潤 _一 （商山の麻潤）	堯
春盡途中 _一 （春盡途中）	堯
題 _二 安州浮雲寺樓 _一 、寄 _ニ 湖州張郎中 _一 （安州浮雲寺の樓に題して、湖州の張郎中に寄す）	堯
題 _二 桃花夫人廟 _一 （桃花夫人の廟に題す）	堯
蘭溪 _一 （蘭溪）	堯
郡齋獨酌 _一 （郡齋にて獨り酌む）	堯
題 _二 桐葉 _一 （桐葉に題す）	堯
齊安郡晚秋 _一 （齊安郡の晚秋）	堯
IV 二度目の挫折	
李甘詩 _一 （李甘の詩）	堯
襄陽雪夜感懷 _一 （襄陽雪夜の感懷）	堯
冬至日寄 _二 小姪阿宜 _一 詩（冬至の日に小姪の阿宜に寄する詩）	堯
龍 _二 鍾陵幕吏 _一 十三年、來泊 _ニ 溢浦 _一 、感 _レ 舊爲 _レ 詩 _一 （鍾陵の幕吏を罷めて十三年、來りて溢浦に泊し、舊に感じて詩を爲	堯

雪中書懐 (雪中に懷ひを書す)	二五
自遣 (自ら遣る)	二四
送國棋王逢 (國棋王逢を送る)	三四
重送絶句 (重ねて送る絶句)	三四
早雁 (早雁)	二七
河湟 (河湟)	二七
江上雨寄 (江上の雨)	二七
崔碣 (崔碣に寄す)	二七
皇風 (皇風)	二七
齊安郡後池絶句 (齊安郡の後池絶句)	二七
雨中作 (雨中に作る)	二七
齊安郡中偶題二首 (齊安郡中にて偶題す二首)	二七
其一 (其の一)	二七
題木蘭廟 (木蘭の廟に題す)	二七
赤壁 (赤壁)	二七
VI 池州へ	二六
秋浦途中 (秋浦の途中)	二六
泊秦淮 (秦淮に泊す)	二五
新定途中 (新定の途中)	二五
正初奉酬歎州刺史邢羣 (正初に歎州の刺史邢羣に酬ひ奉る)	二五
睦州四韻 (睦州 四韻)	二〇
朱坡 (朱坡)	三三
憶遊 (朱坡に遊びしを憶ふ 四韻)	三〇
朱坡絶句三首 其一 (朱坡絶句三首 其の一)	三二
其一 (其の一)	三三
其三 (其の三)	三三
書懷寄 (中朝往還) (書ひを書して中朝の往還に寄す)	三四
除官歸 (京陸州雨霽) (官に除せられて京に歸るに、陸州は雨霽れたり)	三四
秋晚早發 (新定) (秋晚早に新定を發す)	三六
夜泊 (桐廬先寄) (夜泊桐廬に泊し、先づ蘇臺の廬郎中に寄す)	三四
重送 (重ねて送る)	二七
池州李使君歿後十一日、處州新命始到。後見歸妓、感而成詩 (池州の李使君歿して後十一日、處州の新命始めて到る。後に歸りし妓に見ひ、感じて詩を成す)	二八
酬張祐處士見寄長句四韻 (張祐處士の寄せられし長句四韻に酬ゆ)	二八
九日齊山登高 (九日 齊山にて登高す)	二八
見下吳秀才與池妓別因成絶句 (吳秀才の池妓と別るを見み、因りて絶句を成す)	二八
登池州九峰樓寄張祐 (池州の九峰樓に登りて張祐に寄す)	二八
池州春送前進士蒯希逸 (池州にて春に前進士の蒯希逸を送る)	二九
春末題池州弄水亭 (春末 池州の弄水亭に題す)	二九
題池州貴池亭 (池州の貴池亭に題す)	二九
池州清溪 (池州の清溪)	二九
見劉秀才與池州妓別 (劉秀才の池州の妓と別るるを見る)	二九
VII 江南へ	三〇
江南懷古 (江南懷古)	三〇
汴河阻凍 (汴河凍れるに阻まる)	三〇
李侍郎於陽羨里富有泉石、牧亦於陽羨粗有薄產 (李侍郎於陽羨里富有泉石、牧亦於陽羨粗有薄產)	三〇
敘舊レ懷、因獻長句四韻 (李侍郎は陽羨里に於て泉石を富有す、牧も亦た陽羨に於て粗薄產有り。舊を敘し懷ひを述べて、因りて長句四韻を獻す)	三〇
今皇帝陛下一詔徵兵、不日功集、河湟諸郡、次第歸降。臣獲覲聖功、輒獻歌詠 (今皇帝陛下は「たび詔して兵を徵するに、日ならずして功集まり、河湟の諸郡、次第に歸降す。臣は聖功を覲ることを獲て、輒ち歌詠を獻す)	三〇
長安雜題長句六首 其一 (長安の雜題長句六首 其の一)	三四
其二 (其の二)	三四
其三 (其の三)	三四
其四 (其の四)	三四
其五 (其の五)	三四

其六 (其の六)	三五
新轉 ^二 南曹 ^一 、未 ^レ 敍 ^二 朝散 ^一 。初秋暑退、出守 ^二 吳興 ^一 、書 ^二 此 篇 ^一 以自見 ^レ 志 ^一 （新たに南曹に轉じて、未だ朝散に敍せられ ず。初秋暑退き、出でて吳興に守たり、此の篇を書して以 て自ら志 ^一 を見す）	三五
將 ^レ 赴 ^二 吳興 ^一 登 ^二 樂遊原 ^一 一絕（將に吳興に赴かんとして樂 ^二 遊原 ^一 に登る一絶）	三五
登 ^二 樂遊原 ^一 （樂遊原に登る）	三五
將 ^レ 赴 ^二 湖州 ^一 留 ^二 題亭菊 ^一 （將に湖州に赴かんとして亭菊に 題め題す）	三五
獨酌 ^{（獨り酌む）}	三五
湖南正初招 ^二 李鄧秀才 ^一 （湖南にて正初に李鄧秀才を招く）	三五
沈下賢（沈下賢）	三五
入 ^二 茶山下 ^一 題 ^二 水口草市 ^一 絕句（茶山の下に入り水口の草市 に題する絶句）	三五
題 ^二 茶山 ^一 （茶山に題す）	三五
春日茶山病不 ^レ 飲 ^レ 酒、因呈 ^二 賓客 ^一 （春日茶山にて病みて酒 を飲まず、因りて賓客に呈す）	三五
X 未編年詩	四〇三
長安送 ^三 友人遊 ^二 湖南 ^一 （長安にて友人の湖南に遊ぶを送る）	四〇三
惜 ^レ 春（春を惜しむ）	四〇四
過 ^二 勤政樓 ^一 （勤政樓に過る）	四〇五
街西長句（街西の長句）	四〇六
春申君（春申君）	四〇七
讀 ^二 韓杜集 ^一 （韓杜の集を讀む）	四一
醉眠（醉ひて眠る）	四一
獨酌（獨り酌む）	四二
西江懷古（西江の懷古）	四五
茶山下作（茶山の下にて作る）	毛
不 ^レ 飲贈 ^二 官妓 ^一 （飲まず官妓に贈る）	毛
入 ^二 白蘋洲 ^一 （白蘋洲に題す）	毛
題 ^二 禪院 ^一 （禪院に題す）	毛
和 ^二 嚴惲秀才落花 ^一 （嚴惲秀才の落花に和す）	毛
題 ^二 白蘋洲 ^一 （白蘋洲に題す）	毛
八月十二日得替後、移 ^居 雪溪館、因題 ^二 長句四韻 ^一 （八 月十一日替を得し後、居を雪溪館に移し、因りて長句四 韻を題す）	毛
隋堤柳（隋堤の柳）	毛
途中一絕（途中の一絶）	毛
IX 死期を悟る	三三
華清宮三十韻（華清宮三十韻）	三三
過 ^二 華清宮 ^一 絕句三首 其一（華清宮に過る絶句三首 其の 一）	三三
其二（其の二）	三三
其三（其の三）	三三
歲日朝回口號（歲日に朝より回りての口號）	三三
江南春絕句（江南の春絶句）	四七
憶 ^二 齊安郡 ^一 （齊安郡を憶ふ）	四八
初冬夜飲（初冬の夜飲）	四九
梅（梅）	四九
山石榴（山石榴）	四九
柳長句（柳長句）	四九
柳絕句（柳絶句）	四九
獨柳（獨柳）	四九
鶴（鶴）	四九
鷺鷺（鷺鷺）	四九
村舍燕（村舎の燕）	四九
雲（雲）	四九
汴河懷古（汴河の懷古）	五〇
送 ^二 隱者 ^一 絕（隱者を送る一絶）	五〇
寄 ^二 遠 ^一 （遠きに寄す）	五〇
盆池（盆池）	五〇
南陵道中（南陵の道中）	五〇
雨（雨）	五〇
宮詞二首 其一（宮詞一首 其の一）	五〇

其一（其の二）	四三
月（月）	四四
贈漁父（漁父に贈る）	四五
歎花（花を歎く）	四五
山行（山行）	四五
寓言（寓言）	四五
傷友人悼吹簫妓（友人の吹簫の妓を悼むを傷む）	四五
青塚（青塚）	四五
逢故人（故人に逢ふ）	四六
寓題（寓題）	四七
早行（早行）	四七
清明（清明）	四七
杜牧略年譜	四七
杜牧関連地図	四七
詩題索引	四七

解 説

杜牧（八〇三～八五二）は「江南春 絶句」（四一七頁）や「山行」（四四三頁）などの七言絶句が広く知られるが、長編の作品にも佳作は多く、また文章でも高く評価されていた。その文業は幅広く、かつ個性に富んでいる。例を挙げれば、詩では「郡齋にて独り酌む」（一二二二頁）、「杜秋娘の詩」（一〇五頁）などの雄編、「烏江亭に題す」（一六〇頁）、「赤壁」（二五八頁）など歴史を詠じた作品、また妓女との交流を描く「張好好の詩」（六八頁）、「別るるに贈る二首」（六二二頁）などが著名である。絶句の名手と評されるが、古詩、律詩、排律も多く、総体的に見て、詩形に大きな偏りは無い。また賦においては、敬宗の宮殿造営を始皇帝の阿房宮になぞらえて批判した「阿房宮の賦」が、科挙受験前に評判を取つており（王定保『唐摭言』卷六「公薦」の条には、国立学校である太学の教官であった吳武陵が「阿房宮の賦」を褒め、杜牧を将来輔弼となる人材として推薦したと記される）、文章では、用兵に関する考え方を示した「罪言」、「十六衛を原ぬ」、「戰論」、「守論」などの論述、および節度使や異民族への対策を記した献策が広く知られている。韓愈、柳宗元の流れを受け継ぐ古文家として位置づけられるが、古文のみならず装飾的な骈体文も巧みに使いこなしている。また祖父杜佑の学問を受け継ぎ、その著述である『通鑑』から多くを学んで、「孫子」の注を著していることも忘れてはなるまい。